

## 式辞

遠くに臨む葛城の山並みにも少しずつ春の気配を感じるこのことのできる今日の良き日、大阪府立日根野高等学校第34回卒業証書授与式を挙行いたしましたところ、ご多用中にも関わりませず、多くのご来賓、保護者の皆様方のご臨席を賜り、本当にありがとうございます。高いところからではございますが、教職員一同を代表して厚く御礼申し上げます。

さて、ただいま卒業証書を授与いたしました240名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。皆さんは今日、本校における3年間の業を終え、晴れて社会に旅立つこととなります。思い起こせば、皆さんの高校生活は、2ヶ月にも及ぶ全校一斉休校という、今まで誰も経験をしたことの無い大変な状況でのスタートでした。その後もこの感染症は収束をすることはなく、日根野高校での3年間は、様々な制約の中での我慢の日々であったことかと思えます。

このように社会全体が内向きとなりがちな状況ではありますが、若く、可能性あふれる皆さんにはぜひ様々なことにチャレンジをしていってほしいと思います。

「この道を行けばどうなるものかと危ぶむことなかれ、危ぶめば道はなし。踏み出せばその一足が道となり、その一足が道となる。迷わず行けよ、行けばわかるさ」これは昨年の10月に亡くなられた、元プロレスラーであり、国会議員でもあったアントニオ猪木氏の「道」と名付けられた有名な一節となります。「元氣ですか！元氣があれば何でもできる」というフレーズで記憶にとどめている人も多いのかもしれませんが。

これらの言葉が示すように、猪木氏は常にそのバイタリティ溢れるチャレンジ精神で、自らの道を示し続けた人物でありました。時には、自身が最強のプロレスラーであることを証明するために、他のボクシングや空手などの違うジャンルの多くの格闘家の挑戦を次々と受け、大変な困難な状況の中においても、その行動力で自らの誇りを示し続けた人生であったように思います。

人は、今までに経験をしたことの無い新しいことに出会ったときや大きな困難に直面したときに、不安に襲われることとなります。時にはその不安の大きさに押しつぶされ、前に向かって進むことを止めてしまうこともあるのかもしれませんが。しかしながら、前への歩みを止めてしまうと、その人の成長は止まってしまうこととなり、その先で得ることができたであろう人生の誇りも失ってしまうことになってしまいます。挑戦をしましょう。「挑戦無き所に成長なし」皆さんの可能性は皆さん自身が思っているよりもずっと豊かに大きくあります。

そして、挑戦をする人は必ず努力をする人となります。何かに挑戦をし、それを形にするために、人は自然と努力を重ねるようになるということです。その昔、太平洋戦争時に、世界に誇る日本の名戦闘機「零戦」を設計し、その後ジブリ映画の「風立ちぬ」の主人公のモデルとされた堀越二郎氏は次のように述べています「大きな仕事をなしとげるためには、愉悦よりも労苦と心配のほうがはるかに強く長い」大きなことに挑戦をし、それを形にする努力は、本当に大変なものであることが良く伝わる言葉だと思えます。しかし、この言葉に続けて「そのあいまに訪れる、つかのまの喜びこそ、何ものにもかえがたい生きがいの人に与えてくれる」ここで述べられている「生きがい」という言葉は、人生を送るうえでとても大切な言葉だと思えます。

皆さんは今日の卒業を機に、今まで多くの人に守られ生きてきたいわゆる「こども」という殻を脱ぎ捨て、今日から一人の社会人として自分の足で人生を歩んでいく事となります。皆さんは声も顔かたちも一人として同じ人のいない、生まれながらにして特別な存在になります。この世にたった一人のオンリーワンの皆さんが、これから歩む人生において、どのような生きがいを見つけ、社会にどのような足跡を残していくのでしょうか。

「何のために生まれて、何をして生きるのか、答えられないなんてそんなのは嫌だ」皆さんも一度は口ずさんだことがあるのではないのでしょうか。皆さんは、まさに今のこの時代に何をなすことを使命としてこの世に生まれてきたのでしょうか。そしてこれからの人生で社会にどのような貢献をし、生きた証を残していくのでしょうか。皆さんがたった一度の人生を、内向きに消極的に生きることなく、自分自身の可能性を信じ、様々なことにチャレンジしながら、自らの生きがいを追い求め度六を重ねていく、そんな充実したものとなることを心より願っています。頑張ってください。

最後になりましたが、今日のこの日を心待ちにし、大変なご苦勞の中で子育てを重ねてこられました保護者の皆様方に、敬意を表します。また、今日までの3年間、本校の教育活動にご理解とご支援を賜りましたことに心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

さあ、名残は尽きませんがいよいよお別れです。皆さんのこれからの幸せなものとなることを願い、最後に改めて「道」の一節を送り、はなむけの言葉といたします。

「この道を行けばどうなるものか、危ぶむことなかれ、危ぶめば道はなし、踏み出せばその一足が道となり、その一足が道となる。迷わず行けよ 行けばわかるさ。」